

土浦の古代布



土浦市立博物館長
茨城大学名誉教授

茂木雅博



明けましておめでとーございます。このたび、第4代土浦市立博物館長を拝命いたしました。

私は、昨年3月まで茨城大学人文学部で博物館学と考古学を担当しておりました。

土浦市立博物館では、市民に親しまれる博物館をモットーにし、今年の正月から館長講話として、市民の皆様とお逢いできることを楽しみにしております。

私は、奈良県立橿原考古学研究所の指導研究員も兼務しておりますので、月に一度は大和(奈良県)を訪れております。また、中国の西安市にある西北大学兼職教授でもありますので、年に何度か中国の大学生にも日本考古学を

講義しております。そこで館長講話では、常陸、大和、中国との交流を中心に話を進めたいと考えておりますので、どうぞご期待ください。

奈良と申しますと、昨年秋季に奈良国立博物館で第59回正倉院展が開催されました。

その展示品の中に一枚の大きな白布(麻布)がありました。その布の端には次のような墨書が見られました。

「常陸国筑波郡栗原郷戸主多治比部小里戸多比部家主輪調曝布尅端長四丈二尺廣二尺四寸専当国司介從五位上佐伯宿祢美濃麻呂郡司擬主帳无位中臣部廣敷 天平寶字七年十月」というものがあります。これは、奈良時代に調税として、つくば市の栗原地区から貢納さ

れたものであります。天平寶字7年は、西暦763年であります。

当時の記録を見ると常陸国は日本一の白布産地であり、国内全域から調布が貢納されています。『常陸国風土記』によると、我が土浦市は信太郡に含まれています。信太郡の条には、孝徳天皇時代(7世紀中頃)、筑波・茨城両郡から700戸を分けて新郡が設置されたことが記録されています。信太郡から貢納された調布がいくつか伝えられています。その一つは、

「常陸国信太郡中家郷戸主壬生部衣麻呂調尅端専当国司正八位上志貴上連秋島郡司擬主帳无位物部大川 天平勝寶四年十月一日」

大野郷は、現在の稲敷市で、天平勝

寶4年は、西暦752年であります。

特に、注目されるのは平城京に運ばれ、それが南都の六大寺に伝わったものが多いことです。例えば、明治時代に天皇に献納された法隆寺の文物の中に「葡萄唐草文錦褥」があります。これは、長さ168cm、幅58cmの褥(敷き物)で、すばらしい文様の絹織物です。

この敷き物の芯に使われた白布の端には、

「常陸国信太郡中家郷戸主大伴部羊調尅端」天平寶勝(実は勝寶)口(六カ)年十月」という墨書があります。

この調布は、1988年に土浦市立博物館が開館するときに模造品を作製し展示しました。さらにもう一点、

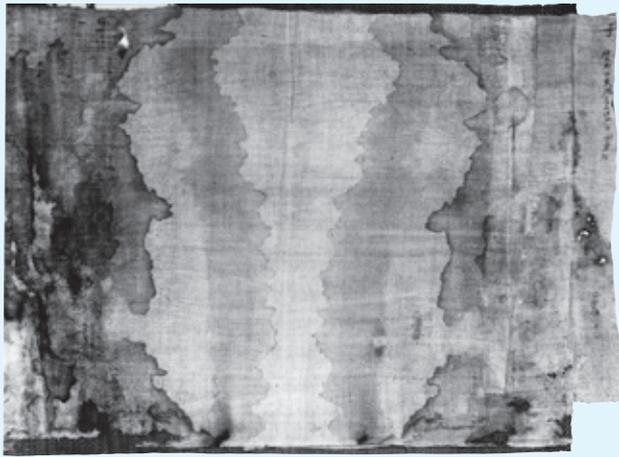
「常陸国信太郡中家郷大伴部中万呂

調老端專当国司生正八位上志貴連秋島郡司擬主物部大川 天平勝寶四年十月」という白布が法隆寺に伝えられています。この麻布には、織耳おりみみが残されており、当事の織幅を知ることができます。

正倉院には、このほかにも常陸国内から調布として貢納された麻布が保管されており、古代に、この地方が日本国内の織布の最大の生産地であったことが偲しのばれます。

当博物館が体験学習の一つとして、織布を実施している背景は、こうした歴史的事実の証明なのです。

私は、今年の「初夢」に、この法隆寺献納織布と白布を土浦に里帰りさせたという夢を持つのであります。



中家郷の調布(右端の上部に墨書銘があります)



重要文化財 葡萄唐草文錦褥—東京国立博物館所蔵—
(褥は机の上敷きや座具として用いられました)



《中家郷の調布 墨書銘》
常陸国信太郡中家郷戸主大伴部羊調老端

館長講座

「土浦」をテーマにした全3回の講座です。

この講座は、市民の皆さんと土浦地方の歴史的な事柄について、対話も交えますので、お気軽にご参加ください。

とき／

● 1月20日(日)：常陸の古代布

● 2月17日(日)：縄文時代の貝塚文化

● 3月16日(日)：なぜ校庭に桜(真鍋のサクラの由来)

※時間はいずれも午後2時～3時30分

ところ／市立博物館地下1階視聴覚

ホール

講師／茂木雅博館長

対象者／原則として全3回受講できる

方

定員／50人(先着順)

参加料／無料(展示室の入館料は105円)

申込方法／電話で

市立博物館 (☎824・2928)

※博物館では、1月5日(土)から、冬季展示となります。また、展示替えの見所を解説した「霞」2号を発行します。皆さんのご来館をお待ちしています。